

実は福岡市柳原（現・中央区赤坂二丁目）にあった私の生家（母方の祖父宅）の一軒おいて左隣にあったのが益田家である。朝日新聞の益田豊彦の名も、子ども頃、母からよく聞かされていたものだ。

益田豊彦の生涯、ことにその著作活動は十分知られていない。豊彦は昭和初期に多くの左翼文献を翻訳した。渡欧後は新聞特派員としてドイツでヒトラーの台頭を目の当たりにする。帰国すると近衛内閣のプレインとなり、終戦時はシヤワ新聞社長として現地インドネシアにいた。本稿では、豊彦が昭和史でどのような役割を果たしたのか、その紆余曲折の人生をたどってみたい。そこには中学修猷館（現・修猷館高校）をめぐる人脈が見え隠れする。

曲坂の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

②

昭和十二(一九三七)年の『修猷館出身者名簿』では、大正七(一九一八)年第三十回卒のページに益田豊彦の名が出てくる。出身校は「東大法」、勤務先は「東京朝日新聞社」、住所は「東京市小石川区雑子(司)ケ谷町一〇」。戦後のベストセラー『もの見方について』で知られる笠信太郎が同窓にいます。

この名簿の退職職員の中に「益田祐之、柳原三丁目」とあるのが、豊彦の父だ。漢文教師として在職三十年、昭和五年に退職した。益田祐之の名は玄洋社員

秋月藩の初代藩主は黒田長興。福岡藩主黒田長政の子で、本藩から五万石を分けて成立した。益田家はこの秋月藩士の家柄である。祐之の祖父、したがって豊彦には曾祖父にあたるのが益田逸叟。秋月の乱に参加した中では、最年長の六十二歳であった。逸叟は除族(士族の籍を奪い、平民に落とすこと)の上、懲役三年となった。

福岡簗子町の藩の米蔵で上級・下級の五学級を編成。逸叟は百八十人ほどから成るクラスを担当したが、服役中に半身不随となり、刑期半ばで保釈されている。祐之の母の弟(豊彦には大叔父にあたる)が静方で、秋月の乱の指導者のひとりとして、二十七歳で斬首となった。

明治七年二月、江藤新平をかついだ佐賀の乱が起き、九年十月には熊本県・



益田静方の肖像(川上水舟『秋月党』より)

演じたのが益田静方であった。静方は東京で大橋陶庵の門に学んだ。前原一誠とも会い、熊本の神風連と前原らとの連携を図ったのも静方である。東京から帰ると私塾を開いていたが、静方を中心に、秋月の乱の密議をこらし、挙兵を決めたのがこの私塾のことだった。首領には今村百八郎を立てた。

翌十年二月、維新の立役者である西郷隆盛が薩軍を率いて行軍を開始、熊本城へと向かう。これが西南戦争で、鹿兒島、熊本、福岡、大分、宮崎の五県が戦場となった。九月、鹿兒島の城山で西郷は自刃、官軍の総攻撃で城山が陥落し、戊辰戦争以来の一連の内乱はついに終わりを告げた。秋月の乱で重要な役割を

指導者として刑死した静方

益田家と秋月の乱①

明治九(一八七六)年の士族反乱・秋月の乱に参加した。祐之の生涯は平坦ではなかった。まずそのことから述べることにしよう。

(永蔵と呼ばれた)が、この時は監獄に転用されていた。下獄した逸叟らはここで囚人夜学校の教師を委嘱された。囚人の学力に応じ

神風連の乱、福岡県・秋月の乱、山口県・萩の乱(指導者は前原一誠)と、九州・山口で士族反乱が続いた。福岡では決起には至ら

なかったが、前原と通じた嫌疑を受け、頭山満・箱田六輔・進藤喜平太ら、後に玄洋社の幹部となる人々が捕縛されている。

捕縛されている。

曲折の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

③

熊本(くまもと)の神風連(かみかぜのつらね)の乱(らん)に遅れること三日、明治九(一八七六)年十月二十七日、今村百八郎(いまむらひやくぱちろう)に率(らて)いられた秋月士族(あきづきしぞく)二百数十人(にひゃくすうじゅうにん)が決起(けつぎ)した(秋月の乱)。まず血祭りに上げられたのが、偵察に向かつて捕縛(とらわれ)された福岡(ふくおか)警部穂波(こうぶくほな)半太郎(はんたろう)だ。穂波(ほな)は、佐賀(さか)の乱(らん)の際(とき)、大久保(おおくぼ)利通(りつう)の部下(ぶか)として奔走(ほんそう)し、裏切り者と目(め)されていた。

秋月隊(あきづきたい)は豊前(ぶんぜん)豊津(ゆづ)へと向かった。豊津(ゆづ)は旧小倉藩(きゅうこくらはん)が新たに藩庁(はんてい)を設けた所(ところ)で、豊津(ゆづ)士族(しぞく)の一部(いっぶ)とはかねて連携(れんけい)の約束(やくそく)があった。ところが豊津(ゆづ)では穩健派(えんけんぱ)が急進派(きしんぱ)を押さえ、秋月隊(あきづきたい)を迎え撃つ準備(じゅんび)を整えていた。

十月二十九日、小倉歩兵第十四連隊(こくらほへいじゅうしよだんたい) (連隊長乃木希典少佐)が到着し、豊津士族と合流して秋月隊に攻めかかった。激しい白兵戦となる中、秋月隊は次々に倒れた。この時、十七人が戦死した。

残兵をまとめた秋月隊は城井谷(しろいご)を経て英彦山(ひこしん)へと敗走した。小石原(こいしはら)を通り郷里(きょうり)の江川谷(えがわがや)をめざしたものの、もはや抵抗する力もな

く、十月三十一日、栗河内(くりがわうち)へ向かったまま消息の途絶(とつたつ)でいったんは解隊(かいたい)を決した。この時、磯淳(いそじゆん)ら七人が割腹(せつぶ)するが、その中には今村隊長(いまむらち隊長)の実兄(じつけい)宮崎(みやざき)車之助(くるまのすけ)、実弟(じつてい)宮崎(みやざき)哲之助(てつしゆのすけ)も含まれている。

今村(いまむら)は再び隊長としてかつがれ、残存兵力(ざんぞんへいりき)をまとめて別行動(べつこうどう)を取った。江川谷(えがわがや)から古処山(ふるじょさん)へ。さらに秋月へ入って敵陣營(てきじんえい)を襲った。今度は山を越えて三箇山(さんかさん)へ向かったまま消息の途絶(とつたつ)した。この時、長男(ちやうなん)静方(しずかた)の行方(ゆくえ)である。危険(きけん)をかえりみず佐賀(さか)地方(ちほう)を歩き回った。ある日、逸叟(いつそう)は背振山(せふりさん)の北麓(きたろく)、早良(はやら)郡(ぐん)椎原村(すいはらむら) (福岡市早良区)の炭小屋(すみこや)に隠れ、うとうと

呼(よ)びかけると、姿(すがた)は消えた。(もしや)と悟(さと)った逸叟(いつそう)は博多蔵本町(はくたぞうほんまち)へ急(いそ)いだ。ここには、静方(しずかた)の姉(あね)が嫁(よめ)いだ塩問屋(しおんや)長浜家(ながはまけ)がある。

十二月三日(じふにがつ三日)の夜、逸叟(いつそう)は静まりかえった長浜家(ながはまけ)の戸をたたいた。室内(しやうむ)は線香(せんこう)の香り(かほ)が立ちこめていた。この日、秋月隊(あきづきたい)の領袖(りゆうしゆ)として今村百八郎(いまむらひやくぱちろう)と益田(えきだ)静方(しずかた)が処刑(じゆけい)され、遺骸(いがい)を納めた二つの棺(こは)が長浜家(ながはまけ)に運び込まれていたのだ。逸叟(いつそう)は自首(じゆうしゆ)する決心(けつしん)をした。

逸叟の夢枕に立った静方

益田家と秋月の乱



県道の崖下にある益田静方の墓(右)。右側面に刑死した日「明治九年十二月三日」が書かれている 一 朝倉市秋月

明(めい)くる明治(めいし)十年(じゆんねん)の夏(なつ)、逸叟(いつそう)は懲役(ちやうやく)三年(さんねん)の刑(けい)に服(はく)し、静方(しずかた)は刑死(けいじ)してすでに亡(な)い。秋月(あきづき)で益田(えきだ)家の留守(くす)を守(まも)るのは、静方(しずかた)の姉(あね)・雪(ゆき)と数(かず)え年(ねん)十二(じふに)歳の祐之(すけゆき)であ

る。雪(ゆき)は「事情(じやうけい)あつて生後(なまご)一年(いちねん)そこそこの父(ちち)を連れ婚(こん)家を去(い)って実家(じつけ)に帰(かへ)ったと、祐之(すけゆき)の子(こ)・豊彦(ゆづ彦)が書いてる。

主(ま)のな益田(えきだ)家に旅商人(りよしや)の男(おとこ)が訪(たず)ねてきた。東京(とうきやう)で世話(せわ)になつたので、静方(しずかた)して墓参(ぼさん)に参(まゐ)りました。

後(のち)、祐之(すけゆき)はこれらの同志(どうし)の好意(こうい)により学問(がくもん)を積(た)む機会(きかい)に恵(めぐ)まれる。祐之(すけゆき)を引き取(と)って世話(せわ)をしたのが、山口(やまぐち)県(けん)令(れい)関(かん)口(こう)隆吉(たかきち)であつた。

(いしたき・とよみ)福岡(ふくおか)地方史研究会(ちほうしけんかい)会長(かいちやう)

曲折の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

④

秋月士族が決起した翌日の明治九(一八七六)年十月二十八日、今度は萩の乱が起きた。秋月と萩を往来して、前原一誠とも親交を結び、意思を通じ合っていたのが、祐之(豊彦の父)の叔父益田静方である。しかも静方は、萩の乱を鎮圧する立場にある山口県令(現在の県知事に当たる)関口隆吉とも旧知の間柄であった。

関口は大橋訥庵の門人で、静方が学んだ大橋陶庵(訥庵の養子)とも深く交わった。大橋一門は老中安

年生まれの間口は静方よりも十四歳年長であり、静方は関口家の「玄関番」を勤めたこともあったという。萩の乱の起きた同じ月の四日、山口で関口の次男が生まれた。山形県から山口県に赴任した父は、山の字を二つ重ねて出と名づけた。父の死後、新村家の養子となり、東京帝国大学を



中学修猷館の教師だった益田祐之

に鹿鳴館が落成し、まさに鹿鳴館時代だけなわ。関口の塾に張っていた。前に挙げた益田祐之君が塾頭であって師匠栗本先生と共に蓄髪をさえしていたのを見ても塾の気風的一端がわかる。

祐之と中学修猷館①

欧化の中、漢学塾に学ぶ

ど、過激な尊王攘夷運動に身を置いていた。関口も江戸で馬上の勝海舟に斬りつけたことがある。齋藤弥九郎道場で剣を磨いた関口だったが、この時は刀がそ

卒業、三十四歳で京都帝国大学教授となる。『広辞苑』の編纂者で、文化勲章を受章した新村出である。叔父静方の刑死後、益田家の将来を一身に背負うことになった祐之少年は、

関口の勧めで、祐之は大橋陶庵の思誠塾(東京)を経て栗本義喬(号・栗里)の蜻蛉塾(千葉県香取市佐原)へと移る。そこに、明治十七年、九歳になった出が入門した。東京では前年

※次回は11日に掲載

曲坂の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

⑤

菊池寂阿公の墓は久しく寒郊のうちに荒れ果てて、荒涼寂寞、だれ訪うものもなく、余輩その廃塔にひさまずきて、流涕数時、忠魂をとむらいしといはしばなりしが…(『玄南文集』)

とする姿勢に好感が持てる。中野正剛、満十六歳の時の、もはや伝説的とも言える有名な文章である。

た。正剛が訪れた頃は、荒れ果てていたらしい。中野正剛がこの文章を書かせたのが、正剛が入学した翌年、明治三十三年に中学修猷館に奉職したばかりの漢文教師益田祐之である。同窓会雑誌が創刊されると、監督の任に就いた。正剛によると、まだ三十代半ばの祐之の編集方針は「修猷館の剛健な学生に似



鳥飼八幡宮に建つ中野正剛の銅像と碑
＝福岡市中央区

祐之と中学修猷館

中野正剛の才能を励ます

に三年生中野甚太郎が書いた一文の冒頭である。

甚太郎は中野正剛の旧名。古文の格調があり、荒涼寂寞とか流涕数時とかの言葉が、リスミカルな効果を出している。美文調に過ぎて、今の感性には合わないかもしれないが、美文を飾る意識はなく、むしろ事実を正確にむだなく描こう

寂阿公は鎌倉末期の武将、肥後の菊池武時のこと。後醍醐天皇に呼応して、姪浜(福岡市西区)の鎮西探題北条英時を攻めて戦死した。正剛がその墓の前で落涙したというのは、福岡市城南区七隈の菊池神社である。天保二(一八三一)年、没後五百年を前に寂阿の胸塚伝承地に墓碑が建てられ

もつかぬ修飾タツプリの美文など真ツ平御免」というもの。寂阿の史実を調べるようにと課題を出された正剛は学者を訪ね、文献を探り、一文を書き上げると、こわこわ提出した。

原稿を読んだ祐之は「これは好い、君は立派に文章が書ける」と誉めあげた。この自信が後年の正剛の活

も見える。祐之には正剛が「意気、平生偉(同級生)を庄せんと欲す」と見えた。誰にも負けたくないという強気な性格。友人たちをグイグイ引っ張る行動力。この点こそ、祐之と正剛が深く交わった理由だろう。後の雄弁家正剛をほうふつとさせる評である。

日露戦後の日本社会では、どの分野でも必死に人材を求めるといふ事態が起きている。正剛よ、ただただ学問に精励せよ、と終る。これから君が活躍する時代が来る、と言ったに等しい。祐之は正剛の才能を見抜き、励まし続けたのである。

(いしたき・とよみ＝福岡地方史研究会会長)

曲城の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

⑥

益田祐之には四人の子がいた。長男、次男、三男、四男はいずれも中学修猷館を卒業している。それぞれ明治四十二(一九〇九)年第二十一回卒、四十五年第二十四回卒、大正七(一八)年第三十回卒、十五年第三十八回卒。三男が豊彦である。

とを語っている。四年生の夏休みの終わり頃、三人でハイキングに行った。山奥の滝つぼで泳いでいて、一人が溺れかけた。もう一人が激流に潜って引き上げ、危ういところを助かった。残る一人はほう然と見守るだけだ。誰が溺れ、誰が助けたのかは明かしていない。五十年後に「今思い出しても背筋の冷たくなる人をおとしめることになるので口にしなかったのだ。彼の文章には、いつもそういう奥ゆかしい配慮がにじみ出ている。」

豊彦は大正七年七月、熊本の第五高等学校(現・熊本大学)の入試に合格、八月十六日、朝鮮・満洲巡遊の途に上った。これは祐之の漢詩からわかることで、詳細は知ることができない。

ついては、父は厳格な人で、家庭でのしつけは相当厳しかった、と豊彦は書いている。そして、五高では三年間、習学寮で起居したが、「勉強にも格別精を出さず、暴れ放題に暴れて野放図な高校生活を送ったのは、厳しい家庭教育の反動だったかもしれないと言えよう。「暴れ放題」を言葉通り受け取ることにはできない

学生時代

五高で自由を満喫、東大へ

めったに自分を語らない益田豊彦が、めずらしく中学時代を回想した文章がある。五年生の時、新任の先生を驚かそうと、教壇の上でオンビキを置いた話。オ

だったが、化学の先生にはこっぴどく叱られた。もう一つ、同窓の笠信太郎、四宮進との三人だけの秘事として、こういうこ

スリルであった」と述べている。想像するに、救助役は豊彦だったにちがいない。それを語れば自分を誇り、他

い。当時は九月入学なので、それまでには帰国したのであろう。中学修猷館で、祐之には「焼火箸」というあだ名が

が、パンカラな気風に触れ、自由を満喫したのは事実であらう。昭和十二(一九三七)年の五高同窓会会員名簿を見

ると、大正十年(大学予科第三十回)卒業の第一部独法(ドイツ語を主に専攻)は同級に、昭和三十九(四十七年、総理大臣を務めた佐藤栄作がいること。とも田豊彦の名がある。旧制高に東京帝国大学法学部に進



卒業を前にした五高生と校舎
—昭和6年1月撮影。筆者の父が所蔵していたもの。豊彦もここを大正10年に卒業した

むが、佐藤栄作は法律学科であり、豊彦は政治学科で道は分かれる。高校時代の二人に親交があったかどうかまではわからない。東大を卒業するのは大正十三年である。

東京帝国大学には学生運動団体・新人会が組織されていた（大正七年―昭和四年）。新人会は後に共産党の活動家を輩出することになる。後年の豊彦と重ね合わせる、在学中に新人会の周囲にいてもおかしくないが、『東京帝大新人会の記録』の会員・会友名簿に豊彦の名前は見いだせない。何らかの影響下にあったのは確かだと思われるのだが……。

（いしきたき・とよみ『福岡
地方史研究会会長』）

曲坂の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

⑦

上海から揚子江の流れをさかのぼったところに湖北省の省都武漢市がある。武漢市は大江(揚子江の異称)をはさんで発達した漢口、漢陽、武昌から成り、明治四十四(一九一一年)年十月十日に武昌で起こった武装蜂起が辛亥革命ののろしとなった(武昌起義)。

祐之の次男康彦は中学修 亦た未だ知るべからず。 真か、夢か、只だ愕如(驚く)く。あの強健な康彦が…祐之には殉職の知らせが信じられなかったのだ。 当時の九州日報を読んでみた。二月七日に死亡記事が出ていた。【漢口五日発去】とある。九日の記事では「四日急死した上海駐屯益田少佐」(漢口を上海と

兄康彦

事変直後、志半ばで死す

昭和三十二年、(兄、

年、非売品)。和装本三冊を帙に収めた豪華な装幀だ。

上海から揚子江の流れをさかのぼったところに湖北省の省都武漢市がある。武漢市は大江(揚子江の異称)をはさんで発達した漢口、漢陽、武昌から成り、明治四十四(一九一一年)年十月十日に武昌で起こった武装蜂起が辛亥革命ののろしとなった(武昌起義)。

六年十一月、益田少佐は

誤記)の海軍中佐、正六位

えた。葬儀は二十三日、福

りである。万里の波濤を越

康彦、軍令部出仕兼参謀に

十四名)の艦長をちよと

航海に出る康彦(数えの二

赴任地漢口に急いだ。時は

への昇任・叙位が発表され

岡市大長寺で盛大に執り行

えて棺が目の前にある。遺

補せられ、支那に赴くを送

一年勤めた益田康彦少佐

行程一万八千里。自愛せよ。

まさに日中間に衝突が起き

ている。「急死」とあるの

会葬者は三百余名と伝えら

永訣、人腸を断つ)。永遠

る。『益田古峯漢詩鈔』

は、海軍軍令部から漢口駐

日頃、厳しい父の一言に万

る上海事変の前夜であった

は今で言う過労死だろう

れた。 祐之は漢詩に心中を吐露

に康彦の生きた姿を見るこ

の一節である。

在武官として派遣された。

感の思いがこもる。

(翌七年一月二十八日、軍

か。享年三十七歳であった。

した。訃報を得て十日余り、

とはできなくなった。志半

祐之(号・古峯)死後、

漢口にはフランスと日本が

昭和四年、(兄康彦、軍

事衝突に発展した)。祐之

十日、博多駅に着いた。軍

寝ても眠れない日々を過ご

ばでの死が痛ましかった。

三男豊彦の「あとがき」を

租界を維持していた。任務

艦に乗り、長江警備の任に

ころが(飛電(電報)、忽

人に交じり、中野正剛や修

んとし)、心は乱れるほか

地方史研究会会長)

付した『益田古峯漢詩鈔』

は現地での情報収集であ

在ること、已に三年。

ち報ず、其の職に殉ずと。

献館全職員・生徒らが出迎

えた。葬儀は二十三日、福

りである。万里の波濤を越



益田康彦中佐が葬られた大長寺一福岡市中央区舞鶴

曲折の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

⑧

私の母方の祖父石井豊吉は、益田家とは一軒間には

裏返して袋折りし、自ら日記

裏返しているの、墨が裏写りしている。インクの質が悪くなってペン先を消耗し、十九年十二月七日から

年の生まれで、豊吉に先立ち十九年四月十日に亡くなった。享年七十九歳。

一、快晴の上天気。晩より寒け身に沁みる様に感ぜらる。流石に小寒に迫りし為めならんと思わる。／本年

戦時

父祐之、死の直前まで日記

私の母方の祖父石井豊吉は、益田家とは一軒間には吉は慶心三(一八六七)年の生まれで、昭和二十(一九四五)年四月八日、数えの七十九歳で亡くなるが、死の三日前、四月五日まで日記を残している。

日記はおそらく青年期からの習慣で、母の幼時の記憶でも、毎年大晦日になると、たまった新聞号外、折

記帳を製本するのが常であったという。昭和二十年になるとさすがに広告紙も不足し、反故になった和紙を

おもろいことに一軒先の益田祐之も日記を書いていたことを三男の豊彦が証言している。祐之は慶心二

交じりの文語体で、毛筆を用いて、一字一画をおろそかにせず、四角ほどの楷書で書かれた。自身に課

は大東亜戦争決戦の第三年目で、官庁は歳末も新年の休日も廃せられたる事とて、福岡の歳末風景も新年

石井豊吉の昭和19年の日記。文面からは益田祐之との親交がうかがえる



も例年とは違い、廻礼者(年始の挨拶回りをする人)などもなく、全く平生と異なることなく、迎も歳末・新年の賑かさはなかりし。／昨年迄は玄関に名刺受など出したるも本年は見合せり。／廻礼者は田代氏と益田氏が見えたるだけ。(以下略)

戦時中で、年末・年始のどかな風景はなかった。その中で、益田祐之が年始に来てるのが目立つ。豊吉は一月三日に(午前、益田、田代両氏方へ新年の廻礼をなす)と、答礼に相手の家を訪ねたことを書いている。この後も二人の間の



益田祐之と石井豊吉の家が一軒おいて並んでいる。「福岡市縦横詳細地図・昭和13年版」より

本の貸し借りなどの記事が続き、年齢の近い祐之と豊吉が親しく付き合っていた様子が見えたり。四月二日(益田氏の病氣見舞をなせり。急性肺炎にして大分重態の様なり。)四月十一日(益田祐之氏、昨日死去せられしとの隣組

回状の知らせあり。益田氏へ悔みに行く。告別式は四月十四日、大長寺(福岡市中央区)で行われた。その二日後の日記に、豊吉は(本日、防空演習をなし、焼夷弾を内の玄関前に投下せり)と書いた。飛行機が演習のために落とした模擬弾が、たまたま自家の敷地内に落下したのだろうか。平穏な日常の中にも、空襲の恐れは現実のものとなりつつあった。

益田祐之と石井豊吉のいずれもが、昭和二十年六月十九日の福岡大空襲を体験することなく亡くなった。(いしたき・とよみ「福岡地方史研究会会長」)

※次回は18日に掲載

(第3種郵便物認可)

曲坂の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

⑨

大正十二(一九二三)年九月一日午前十一時五十分、昼食時の東京を大地震が襲った(関東大震災)。帝都に広がった大火災に、東京帝国大学も類焼し、図書館や研究室の貴重な書籍が失われた。

益田豊彦が東京帝国大学法学部政治学科を卒業するのは翌十三年四月(数え年二十五歳)。創立されたばかりの高松高等商業学校(現・香川大学経済学部・

法学部)へと赴任した。父がそうであったように、まと至る歴史をたどった

部省直轄の、全国では十二番目の高等商業学校だ。豊彦は講師の身分で、寮務主任心得を命じられた。やがて教授に昇任、三学

れ、新思想を抱いて学生気分分で生徒と談笑されるのが得意で、一同の敬愛をあつめた。十月九日には全国から来賓を招いて開学式が大々的に挙行されたが、この時点でも豊彦は教授として在籍している。ただ、後の回想によると、十月には退職に

教師生活

高松高商を二年半で辞職

ずは教師としての道を歩み始めたのだ。

高松高商は大正十二年十月の設立で、翌年四月に最初の入学生を迎えた。文

『又信回顧三十五年』(昭和三十四年発行)によると、益田教授は(異彩を放った)と言ふ。〈寮生の監督をさせ、親身をもって世話をさ

追い込まれた。高松高商での在職はわずかに二年半であつたが、この時の教え子との親交は晩年に至るまで保たれることになる。

高松高商退職の背景には一つの「事件」があつた。夏休みに上京した豊彦は労働農民党本部に書記長三輪

三輪寿壮は現在の福岡県古賀市の出身で、中学修験館第二十六回卒(大正三年)。第三十回卒の豊彦よ



益田豊彦教授

高松高商教授時代の益田豊彦『又信回顧三十五年』より

に普通選挙法が成立、納税額による制限が撤廃されて、満二十五歳以上の男子に選挙権が拡大した。これを機に、合法的な無産政党として十五年三月に成立したのが労働農民党である。

りも四年の年長である。当時の中学は五年制なので、在校中に面識があったことだろう。三輪は第一高等学校を経て、東京帝大法学部へと進み、大正九年七月に法律学科を卒業した。この点でも三輪は豊彦の先輩に当たっている。三輪は左翼の学生運動組織である帝大新人会のメンバーで、卒業後は弁護士になり、農民運動にも参加していた。豊彦が三輪とかわした雑談が思わぬ波紋を広げることになるのである。

「学校の先生はおもしろいですか？」と三輪が問う。「いや格別おもしろいということは……」と豊彦。「どうです、労働農民党の仕事でも手伝ってみませんか」と三輪はたたみかける。豊彦が「それもおもしろいかもしれませんね」と応じたのは、その場での軽い雑談に過ぎなかった（とは本人の回想である）。

ところが、そのやりとりが、たまたま居あわせた記者により「益田氏高松高商の教職をなげうって労働農民党に入る」という見出しで報道され、高松では大騒ぎになった。刑事がしきりに訪ねてくるし、地元紙はでかかど報じる。

豊彦は校長の心労を見かね、責任をとって辞職した。自らまいた種とはいえ、望まざる転機であった。

（いしたき・とよみ―福岡地方史研究会会長）

※次回は22日に掲載

曲折の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

10

大正十五(一九二六)年十月、高松を去った益田豊彦は直ちに労働農民党の実践活動に身を投じた。

同日二十四、五日の第四回中央委員会で、豊彦を誘った三輪寿壮書記長が辞任・退席し(中間派・右派の分裂)、一方、豊彦は調査部長の任に就いた。

社会主義の立場に立つ政党として最初に結成されたのは農民労働党だ。しかし、非合法で地下活動に従事する日本共産党との関係を疑われ、大正十四年十二月一

普通選挙実施をひかえ、労働運動・農民運動の活動を全国的に結集した単一无産政党の創出は不可避と考えられていた。だが、共産党の影響下にある左派が参加する限り結社禁止は目

に見えている。こうして左派を排除し、右派と中間派によって、大正十五年三月に大阪で結成されたのが労働農民党であった。

同年十二月、分裂した右派は社会民衆党を、中間派は日本労働党(三輪寿壮が参加)を結成、左派が労働農民党を掌握した。委員長

党も結社禁止を命じられた。豊彦の翻訳活動は三・一五事件をまたいで、昭和二年から五年に集中している。合本を除いても計十五冊。いずれも共産主義思想に関する文献で、内四冊がスターリンの著作の翻訳である。

労働農民党へ

激しい階級闘争に身を置く

大山郁夫(早大教授)、書記長細迫兼光。豊彦は細迫を支えることになった。

昭和三(一九二八)年三月十五日、全国で共産主義者が検挙され(三・一五事件)、四月十日、労働農民

でも自分はいしたことはしていないと、あえて踏後しはらう労働農民党の地方遊説の手伝いなどをした。事実、激しい階級闘争の中に積極的に身を置いていたのである。単なる「生活の道」とし

でも自分はいしたことはしていないと、あえて踏後しはらう労働農民党の地方遊説の手伝いなどをした。事実、激しい階級闘争の中に積極的に身を置いていたのである。単なる「生活の道」とし

ての翻訳ではなかった。豊彦の訳書の一冊は発禁処分を受け、改訂版も発禁となる。当時は彼もまた、亀井勝一郎の言う「思想に憑かれた青年」（『我が精神の遍歴』の一人だったのだ。

父祐之は、そうした豊彦



労働農民党の結党式—『又信回顧三十五年』より

を、昭和四年七月二十八日、糸島郡野北の海上にある小呼嶼に釣りに誘った（『益田古峯漢詩鈔』）。

父子でどのような会話が交わされたことであろう。

ふたりを小呼嶼に案内した宗道太は中学修猷館・五高・東大法学部と、十一年にわたって豊彦と同じ道を歩んできた。

昭和二年、益

田豊彦はローザ・ルクセンブルク著『資本蓄積論』を出し（高山洋吉との共訳）、一方、宗道太はその前年に同著の『資本蓄積再論』を訳していた。四年には両書を合わせて、平凡社の社会思想全集第十四巻に収録されて、宗道太と豊彦とは思想的にも共鳴する、同志的關係にあったようである。宗道太は昭和十二年以前に、数え年三十八歳にも満たない若さで亡くなっている。

（いしたき・とよみ—福岡地方史研究会会長）

曲坂の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

⑪

叢文閣版『合本 無産者政治教程』は共産主義を象徴する赤い色の表紙に1、2、0、4の数字が並ぶ。背文字でも、第3部に当たる部分を(〇)で強調した。訳者は益田豊彦と冬木圭(こちらは変名くさい)。

昭和六(一九三二)年四月発行。前書きにはこうある。

〈無産者政治教程は発売以来既に今日までに、数十版数万部を売りつくした。読者の数は或は百万を超えたであろう〉

合本発行の際しあえて訳文に手を加えなかった。その理由は発売禁止の根拠を与えないためである、と断る(『批判』六年五月号)。

合本発行の際しあえて訳文に手を加えなかった。その理由は発売禁止の根拠を与えないためである、と断る(『批判』六年五月号)。

第二部、第四部の合法性が確保されているのだ。伏せ字の「X」は取り締まる側に抹消されたのではなく、あらかじめ引っかけた結果なのである。「書中Xの多いのは遺憾であるが、併しそれによって全体の理解を妨げることは決してない」と書評が出ている(『批判』六年五月号)。

益田・冬木はあきらめないう。同年十二月、今度は改訂版を出す。国立国会図書館にはこの時の内務省の検閲正本が残っている。戦後、米国に持ち去られたものが昭和五十一年に返還された。表紙には「安寧禁止」

発禁、また発禁

佐野を名乗り捨て身で出版?

合本の元になった青年コミンテルン編『無産者政治教程』は二年十二月発行の第一部から三年十一月発行の第四部まであり、第三部「青年同盟論」は三年七月四日に「安寧秩序を紊す」

合本の目次には「XXXXの役割」とか、「XXXXと何か?」などの文字が並

合本の元になった青年コミンテルン編『無産者政治教程』は二年十二月発行の第一部から三年十一月発行の第四部まであり、第三部「青年同盟論」は三年七月四日に「安寧秩序を紊す」

のスタンプ。発行翌日には発売禁止となった。万事休す。ところが、三度、第三部が今度は「青年同盟の基本問題」のタイトルで発行されたのである。五年四月発

行。発行所は左翼書房に替わった。訳者佐野英介の、俳優のようなスマートな名前はおそらく変名であろう。

未来を有す!」と書き出しているのは、佐野訳も全く同じ。それに続く部分で「労働者階級に理解させるために倦むところを知らなかつた」とあるのが、佐野訳では「倦まず倦まず全力をつくした」とわずかに違う。おもしろいのは以下のような箇所である。

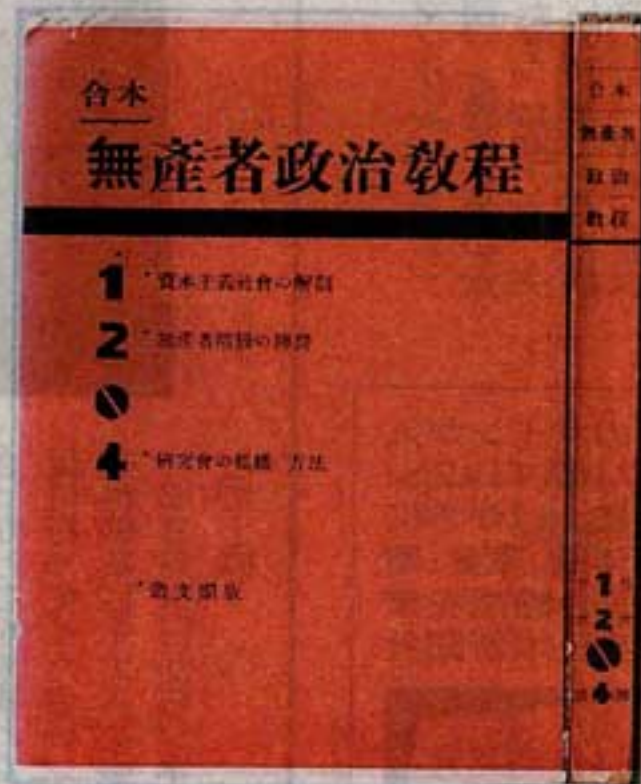
〈労働者階級は、彼等自身の青年が自分達にXXXXするように教育されて行くのを放任しこれを許しておく

ことは出来ない(改訂版) 佐野訳は彼等自身の青年が、自分達に反抗するように教育されるのを放任し、これを許しておくことは出来ない(佐野訳) 読点を打ち直し二文字減っただけの違い。こなれないう翻訳調まで、うりふたつの文章である。驚くのは伏せ字を起していることだ(1)では「反抗」の二文字。佐野訳は当然のことく発禁となった。

豊彦は、どうせ禁止になるのならば伏せ字の数をしほり込み、佐野英介を名乗って、捨て身の覚悟で出版に挑んだのではなからうか。佐野訳「青年同盟の基本問題」は益田・冬木訳「青年同盟論」の身代わりということになる。

(いしたき・とよみ)福岡地方史研究会会長

※次回は25日に掲載



叢文閣版『合本 無産者政治教程』。赤い表紙が目立つ

(第3種郵便物認可)

曲坂の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

⑫

昭和三(一九二八)年、労働農民党が解散すると、益田豊彦はもっぱらドイツ語文献の翻訳に打ち込んだ。

特高(思想取り締り担当の特別高等警察の略称)の目は豊彦の周りにも光るようになった。『特高月報』(五年十月)の「新五高会の創立」という記事。「五高(第五高等学校)出身の在京左翼分子」が中心となり、春から新五高会の創立を画策しているとし、総会参加者の中に豊彦の名もあがっている。新五高会は同窓会を隠れ

みのに「極左学生の行動」「一般の非合法運動」を支

大正十二年十月(関東大震災の翌月)に創刊号を出した。フェニックスになぞらえ、焼け跡から出発した。昭和十一年六月『東大陸』と改題、その後、『我観』『真善美』『綜合文化』と改題を繰り返して二十四年一月まで続いた。雪嶺と娘婿である正剛の個人誌とい

行のルートを選んだようだ。「遠遊の志、始めて酬ゆ」という祐之の漢詩が、豊彦のかねてからのドイツ遊学の希望を物語る。別離に際し、「誓って知己(友人達)に負くなかれ」と、父は子の背中を押しした。豊彦の回想は「昭和六年、これという目的もなく、バリ

送る」が載っている(七年二月三日(五日)。驚いたのはその肩書だ。伯林特派員。豊彦のベルリン行きは、「漠然」ところか、九州日報特派員を兼ねていたことになる。九州日報の社長は昭和三年から中野正剛が務めており、社長を退いてからも十

ベルリン特派員

中野正剛の支援でドイツへ

持する動きではないか。其の行動、嚴重注意の要あるもの」と結論した。労働党解散後、月刊誌『我観』編集に携わったとも言われる。『我観』は三宅雪嶺の『日本及日本人』『女性日本人』、中野正剛の『東方時論』を統合するように、

う性格が強く、豊彦の父・祐之の愛弟子とも言える正剛が、豊彦に救いの手を差し伸べたということだろう。六年十月二十四日、豊彦

ク然とヨーロッパに渡り、ドイツでプラブラしておりました」と、相変わらず謙虚な物言いに終始する。ところで、実兄、海軍中

五年まで経営権を握っていた。この肩書にもまた、正剛の好意が透けて見える。記事は短いながら昭和六

六年十月二十四日、豊彦は敦賀(福井県)を発し、シベリア鉄道経由でベルリンをめざした。満州事変勃発の翌月であり、ソ連直

佐益田康彦の訃報が報じられたのと同時期の九州日報に、豊彦のベルリンからの通信「憂鬱なりし三二年を

裕階級の負担軽減、大衆の負担加重」へ向かったと言

の不滿を背景に、総選挙で議席を伸ばしたヒトラーが首相に就任し、合法的に政権を握るに至る。豊彦はその一部始終を目撃した。豊彦はやがてここベルリンで朝日新聞特派員になるのだが、それは見えない手につき動かされたとか言

衆諸君は…政府や資本家や政治家などの行動を監視しなければならぬ」と、まるで演説の響きを帯びる。第一次世界大戦(一九一四―一八年)で敗北した帝政ドイツは、民主的なワイマール憲法(一九一九年)を持つワイマール共和国へと移行した。二九年の世界大恐慌はドイツを直撃、国民はインフレ・失業に苦しんだ。そして三三年、国民

地方史研究会会長)

憂鬱なりし

「三二年を送る」

伯林特派員 益田豊彦

昭和七年二月三日付、九州日報に掲載されたベルリン特派員、益田豊彦の記事

曲折の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

⑬

昭和七(一九三二)年一月三日の東京朝日新聞に、ベルリン特派員黒田礼二(本名・岡上守道)のヒトラー会見記が掲載された。筆名の礼二がレーニンに由来すると知ったら、ヒトラーはどのような反応を示しただろう。

ベルリン滞在中の益田豊彦が朝日新聞に採用されるには、いくつかの事情が重なった。

『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』によると、きっかけは六年九月に始まった満洲事変報道をめぐる社内対立だ。東京朝日が政府支持に傾いたことに、「反陸軍」の立場から大阪朝日の整理部が反発した。

七年一月、大朝整理部次長の大山千代雄をベルリンに動かし、ドイツ滞在の長い黒田が呼び戻された。ヒツヘ来たようなものだ。ここに「朝日新聞の」益田豊彦が誕生する。

昭和八年一月三十日、首相に就任したヒトラーは、二月一日に国会を解散。同二十七日、国会議事堂放火事件が起こり、共産党、社会民主党への攻撃が始まった。総選挙は暴力的な選挙干渉のもとで実施された。ナチスの一党独裁が実現し、ワイマール共和国の崩壊から第三帝国へと、ドイツ社会の変化はすさまじい。翌九年八月二日、ヒ

朝日新聞入社

大衆のヒトラー熱を記事に

ところが、納得しない大山は赴任せず、同年四月、代わりに東朝政治部長関口泰がベルリンへ向かった。関口は「心算します」、十一月、病気になるって帰国。

この時、ベルリンに来てようやく一年になる豊彦が、特派員不在を補うために、ベルリン特派員を嘱託された。朝日新聞に入るために、長い回り道をして

ところが、納得しない大山は赴任せず、同年四月、代わりに東朝政治部長関口泰がベルリンへ向かった。関口は「心算します」、十一月、病気になるって帰国。

この時、ベルリンに来てようやく一年になる豊彦が、特派員不在を補うために、ベルリン特派員を嘱託された。朝日新聞に入るために、長い回り道をして

トラーは大統領を兼任し、総統と呼ばれるようになる。八年六月十八日付東京朝日新聞夕刊は、見開きの構成で、在ベルリン益田豊彦「『国民革命』途上のドイツ」を掲載した。豊彦は「一ヶ月末(ヒトラーの首相就任)以来のドイツは、たぎるようなヒトラー熱と交錯した、お祭騒ぎの絵巻物だ」と

トラーは大統領を兼任し、総統と呼ばれるようになる。八年六月十八日付東京朝日新聞夕刊は、見開きの構成で、在ベルリン益田豊彦「『国民革命』途上のドイツ」を掲載した。豊彦は「一ヶ月末(ヒトラーの首相就任)以来のドイツは、たぎるようなヒトラー熱と交錯した、お祭騒ぎの絵巻物だ」と

と云う。大衆を熱狂させるイベントが、次々に打ち出されてきたからである。

民主主義は危機に瀕していた。ワイマール体制を支えた社会民主党の要人は「ヒトラー政府は遠からず民衆の信望を失って倒壊する。それまで社会民主党は袖手して悠々と待つ」と豊彦に語った。豊彦は反論する。

「政党にとっては、活動の停止は同時に自殺を意味する。ヒトラー政府の倒れる前に社会民主党そのものが粉砕され…たらどうするか」

記事は「最後に笑うものはもっともよく笑う。最後に笑うものが何者であるか。それはなお依然として一つの謎である」と結ばれる。ナチスの一党独裁の永



ナチスの一党独裁について益田豊彦が書いた記事
—昭和八年六月十八日付東京朝日新聞より

続には懐疑的であった。

昭和九年、帰国した豊彦は正式に朝日新聞社に入社し、九月設立の東亜問題調査会に配属された。中学修養館の先輩、東京朝日主筆・緒方竹虎の推挙である。調査会に大阪朝日から尾崎秀実が転じてきた。豊彦はここで尾崎と初めて出会う。

東アジア地域(東亜)の研究・調査という仕事。豊彦自身は「私は東京朝日に拾われ、最初、東亜問題調査会勤務という新聞製作の本流をはずれた仕事にたずさわった。やがて私も論説委員兼務になったが…たまたまにボックスに立たされても、精々内野ゴロを打つピンチヒッター程度の論説委員でしかなかった」と控えめに述懐している。

(いしたき・とよみ)福岡地方史研究会会長

曲折の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

⑭

朝日新聞が主筆制をしいたのは昭和九(一九三四)年四月。大阪朝日、東京朝日とも初代主筆を中学修猷館出身者が占めた。大阪では高原操、東京では緒方竹虎である。高原は中学修猷館第七回卒(明治二十八―一八九五―年)、東大文学部と京大法学部を卒業していた。緒方竹虎は第十八回卒、早大出身である。

同年九月、東亜問題調査会が設置された時、常任幹事に就いた大西高(東京朝日論説委員)がやはり修猷館第二十回卒。上海の東

常に往来があつた(尾崎秀実)。緒方、笠、尾崎、豊彦らは日常濃密な接触を保っていたのである。

戦前、三度にわたって首相を務めた公爵近衛文麿のフレイションとして昭和研究会があつた。昭和研究会の人は朝日新聞や東亜問題調査会へとつながる。

近衛の友人後藤隆之助と東大教授蠟山政道が中心になつて設立された。後藤と緒方竹虎の間でこんな会話が交わされたという(酒井三郎『昭和研究会』)。

緒方「あなたのところに、うち(朝日)の連中がよく行っているようだが、うちで働いている時間より、あなたのところにおる

泰、佐々弘雄、沢村克人、益田豊彦、笠信太郎、尾崎秀実らが委員として出ており」とあるが、これに大西高を加えねばならない。佐々弘雄は熊本の済々黉高校の創立者・佐々友房の子(危機管理専門家の佐々淳行氏は弘雄の子)。東京帝大法学部政治学科出身で、豊彦の四級先輩に当た

近衛文麿

ブレインの研究會へ参加



近衛文麿

時間のほうが多いのではな

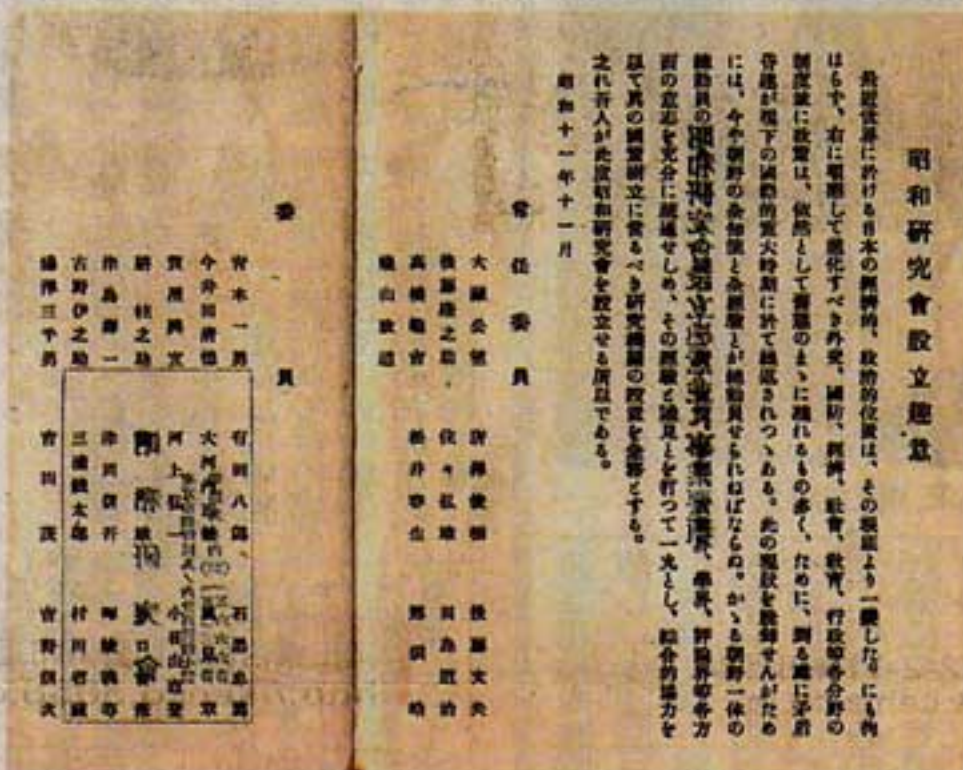
後藤「その点はよくわからないが、月給はそちらでお願いしますよ」

酒井によると、「当時朝日からは、前田多門、関口

尾崎秀実第二十二回調査(ソルゲ事件関係)に昭和研究会は昭和十一年頃後藤隆之助が個人的に創設したものでありますが、同会には創立当時より蠟山政道が関係し、同氏と友人関係

にある朝日新聞論説委員佐々弘雄も関係を持っていた」とある。

佐々と笠は昭和研究会の常任委員に名を連ねた。豊彦は外交問題研究会委員。十五年からは尾崎も同委員



昭和研究会の設立趣意書

に加わった。

同年五月、後藤隆之助を中心に、昭和研究会の一部は、既成政党を解散して国民全体を結集する組織（国民組織）をつくるために動き始めた。佐々、笠はその中心的なメンバーだった。これが近衛新体制と呼ばれるプランである。

同七月、第二次近衛内閣が成立。十月、（上から）の官製の新体制は大政翼賛会へと変質した。後藤は大政翼賛会の役職に就き、十一月、中心を失った昭和研究会は解散した。

戦後、研究会の後身として昭和同人会が再建された。幹事北岡豊治さんとは幾度かお会いしたことを思い出す。

（いししたき・とよみ＝福岡地方史研究会会長）

※次回は30日に掲載

曲折の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

⑮

昭和九(一九三四)年の晩春、ひとりの青年が大阪朝日新聞社に尾崎秀実を訪ねた。上海のジョンソンが今、日本に来ていて尾崎に会いたがっているという。

尾崎は三年十一月から七年二月まで中国・上海支局に勤務した。学生時代から共産主義思想に共鳴した尾崎は、上海でアメリカ人アグネス・スメドレーと交際を深め、ジョンソンこと、リヒアルト・ゾルゲを紹介され、諜報活動に加わっていたのだ。

ゾルゲは現在のアゼルバイジャン共和国(当時はロシア帝国)で、ドイツ人を父に、ロシア人を母に生ま

れた。第一次世界大戦に従軍、三度負傷して、右足が二・五センチ短くなり、兵役からは自由になった。

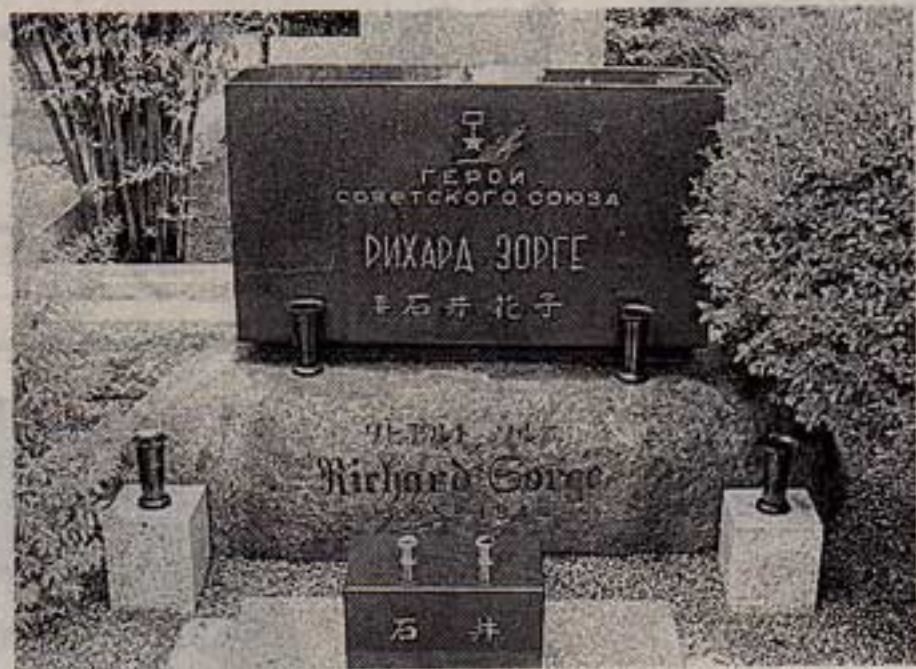
ドイツ共産党に入党、ハンブルク大学で政治学博士号を取得した。やがてコミンテルンに抜擢され、大正

コミンテルンから赤軍第四部に移ったゾルゲは諜報活動に就いた。初め上海で活動し、日本潜入の指示を受けて、再び尾崎の前に現れた。尾崎が昭和九年九月、東京朝日新聞社に新設された東亜問題調査会に転動したことは好都合だった。

ゾルゲは新聞特派員で、



リヒアルト・ゾルゲ



多摩霊園にあるゾルゲの墓(神田優氏提供)

もたらすことになった。昭和十六年六月、ドイツ軍はソ連への侵攻を開始した(バルバロッサ作戦)。不意を打たれたソ連は劣勢に陥った。ドイツの意図を予告したゾルゲの通報は、この時は生かされなかった。

同年七月、日本軍は対ソ戦を想定し、満洲国に兵力を集中した(関特演と呼ばれる大規模な演習)。このままではソ連は東西から挟撃されることになる。

九月六日、御前会議の結果は対ソ参戦ではなく、東南アジア地域への進出だった。尾崎らが情報を確かめた上で、ゾルゲは直ちにモスクワに暗号を送った。ソ連は日本に備えたシベリア国境の兵力を、対独戦に投入できることになった。歴史を変える情報であった。十月、大役を終えたゾルゲ、尾崎らはいっせいに検挙された(総計三十五名)。

ゾルゲ、尾崎は十九年十一月七日(ロシア革命の記念日)、巣鴨拘留所で絞首台に消え、他に五名が獄死した。益田豊彦は後に「人間尾崎」という一文を書いた。豊彦は十五年秋から二十一年半ばまで、ほとんど東京、日本を離れていてゾルゲ事件を身近に体験しなかった。へ一番忘れがたい旧友の一人」と言いながら、尾崎との付き合いは「徹頭徹尾、ムタ話や酒の相手として取扱われていたもの」としか思えない」と言う。

元ベルリン特派員の豊彦を、尾崎はドイツ人記者ゾルゲに紹介しなかっただろうか。たとえ出会っていたとしても、変名を使っていたから、お互いに『新ドイツ帝国主義』の原著者と翻訳者だということに気付くはずもなかったのだが。(いしたき・とよみ「福岡地方史研究会会長」)
※次回は2月1日掲載

ゾルゲ事件

旧友尾崎秀実が絞首刑に

十四(一九二五)年、ソ連共産党に入党。ソントレルの名で『新ドイツ帝国主義』を刊行したのがコミンテルン時代のことだ。

カモフラージュにナチスに入党し、在日ドイツ大使館にも自由に入りました。尾崎は近衛文麿のシンクタンクとも言うべき昭和研

究会に参加し、近衛の側近たちの朝飯会のメンバーであり、第一次近衛内閣(昭和十二年六月―十四年一月)では内閣嘱託の地位を得

た。職場は首相官邸である。重要機密に接近する尾崎と、学究的ですぐれた分析力を持つゾルゲ。ゾルゲスバイ団はまれに見る成功を

(第3種郵便物認可)

曲坂の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

被告人を懲役二年に処す。

但し此の判決確定の日より三年間、右刑の執行を猶予す。

終戦の日、昭和二十年八月十五日からまだ間がない九月四日(戦艦「ミズーリ」

での降伏文書調印の二日後)、横浜地方裁判所での

一人の被告が裁かれた。十八年五月十一日に検挙されているので、すでに二年三ヵ月以上を、未決のまま獄中で過ごしていた。

被告は益田直彦、三十八歳。判決は言う。〈被告人は中学教師の厳格なる家庭に生育し、福岡県立中学修

獄を経て……〉

厳格な中学教師とは益田豊彦の父、祐之に他ならぬ。直彦は豊彦の八歳下の弟である。中学修獄館大正十五年第三十八回卒だ。昭和十九年四月十日、祐

と呼ばれる。中村智子『横浜事件の人びと』によると、関係者は六十二人、うち四人が獄死した。直彦に前後して懲役二年執行猶予三年の判決を受けた者が実に二十六人に上る。判決はほとんど「機械的に」出されたのだ。

この事件に取材した石川達三の小説『風にそよぐ葦』に、松田安彦の名で登場するのが益田直彦である。

弁護側からすれば、悲惨な獄死を避けるために、一日も早く釈放にこぎつけた思いがあった。

直彦は中学卒業後、鹿児島高等農林学校(現鹿児島大学農学部)に進んだ。卒業後の履歴は判決に詳しい。

弟直彦

横浜事件、言論弾圧の犠牲に

之が七十九歳で亡くなった時、末子直彦は獄中にあつた。祐之はどんなにか心残りだったことだろう。

この出来事は「横浜事件」

員、日滿財政経済研究会ソ連研究員を経て、昭和十二年六月頃企画院に就職し、嘱託として調査部に勤務し、昭和十六年七月頃…財

団法人世界経済調査会(外務省の外郭団体)に転じ、主事としてソ連班に勤務した。

直彦は連日の拷問に耐えていたが、他の検挙者の自

白に合わせて、十八年十月頃、特高の(思い通りの手記)が作られた。直彦は共産党再建の目的でソ連へ入ろうとした、とされた。



極秘の印が押された、益田直彦『ソ連コルホーズ政策の近況』(皇月会発行、昭和14年11月報告分)。皇月会理事長は貴族院議員・男爵大蔵公望(きんもち)で、週1回のソ連研究会が18年4月まで7年間続いた

一人いた。まず部下が検挙され、拷問によって直彦の名前が出…と事は進んでいく。このあたりの経緯が「風にそよぐ葦」で描かれている。横浜事件関係者はいくつものグループに分かれるが、その内の「ソ連事情調査会事件」で検挙された。

戦後、拷問に加担した特高刑事は被害者たちによって告発された。そのうち三人に実刑判決が下ったが、サンフランシスコ講和条約による特赦で実刑に服することはなかった。拷問の証拠として採用されたのは、直彦が面会時に夫人に預けたカサバで、それが太ももの傷と一致することが証明されたのだ。最高裁の廊下で三人の元特高は床に座り、直彦に謝罪した。

(いしたき・とよみ)福岡地方史研究会会長

(第3種郵便物認可)

曲坂の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

17

中村智子『横浜事件の人びと』には興味深い記述がある。昭和十九(一九四四)

年六月三十日、朝日新聞社からひとりだけ検挙された酒井寅吉の回想にふれた部分だ。石瀧注(一)内も中村によるが、「執筆」は「翻訳」の誤り。

検挙の手を(朝日新聞社の緒方竹虎、佐々弘雄、嘉治隆一、笠信太郎、益田豊彦(益田直彦の実兄で『無産者政治教程』など執筆)、千葉雄次郎らへひろげる方針が特高にあったらしい)

豊彦も横浜事件拡大の網にかかっていたというの

終戦前後

東京離れ、さらにジャワへ

衛のブレーン、昭和研究会をリードした尾崎秀実が刑死し、三木清も獄死したという事。豊彦の親友、笠信太郎も軍部・特高に生まれ、緒方が海外へ逃がした。

義者)の批判が起きた。酒井三郎『昭和研究会』はこう書く。
〈朝日新聞社の緒方竹虎はこのような情勢を見て、笠を欧州特派員として出すことを決意し、笠は昭和十五年十一月、アメリカを経てドイツに脱出し、以後七年間滞欧生活を送った〉

米秘密機関と接触し、対米講和の可能性を探ることになる。緒方は東條内閣の後を承けた小磯昭内閣(十九年七月―二十年四月)で内閣情報局総裁に就いた。二十年七月九日、笠はベルンの日本大使館から当時内閣顧問の緒方に宛て極秘電報を打ち、一日も早い終

だ。同事件を、神奈川県警特高課と上層部が、反東條の象徴的な存在近衛文麿にまで及ぼそうとしたとする見方もあるが、真相はわからない。

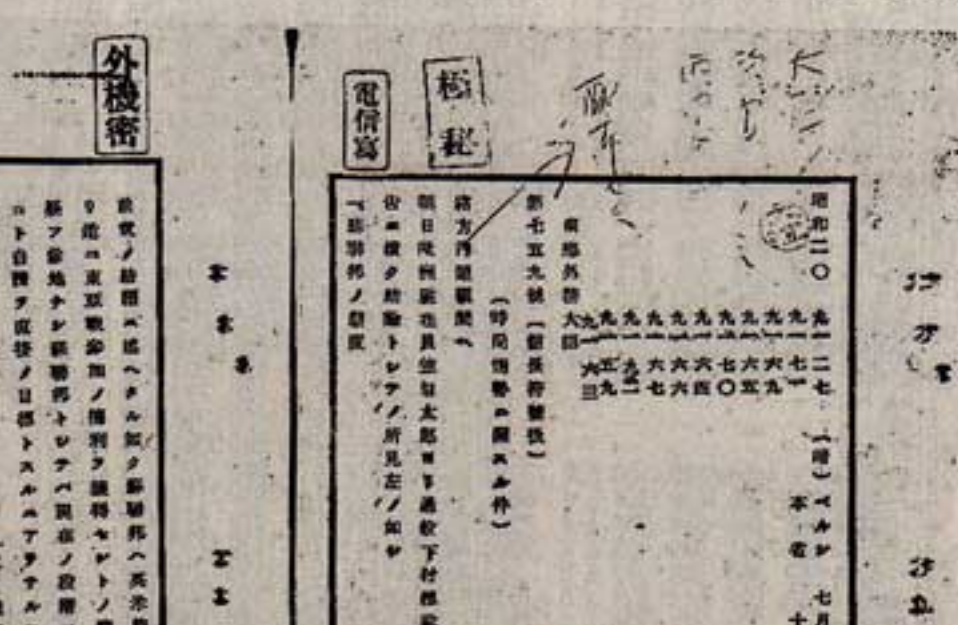
に生まれた。昭和十四年十一月、昭和研究会での検討を踏まえ『日本経済の再編成』を刊行、ベストセラーとなった。資本主義を修正する意図を含んでいたの

その年十二月、リスボンに上陸、十六年一月、ベルリンに入った。この後、独ソ開戦、真珠湾攻撃と続き、帰国の道が鎖された。

戦の決断を求めた。この件は坂田卓雄『スイス発緊急暗号電報』笠信太郎と男たちの終戦工作(西日本新聞社)に詳しい。西村京太郎「D機関情報」の笠井記者は笠がモデルになっている

る。豊彦は大阪本社経済部長となり東京を離れた。昭和十五年の秋から廿一年の半ばまで、一年余りを除いてはほとんど東京を離れ、日本を離れて暮らした

東京にいた一年余りは東京本社東亜部長の時代である。今西光男『新聞資本と経営の昭和史』によると、十八年八月八日から七月三十一日まで、東亜部長益田豊彦は緒方に従い(南方の



極秘・外機密の文字のある暗号電報写し。宛先の緒方内閣顧問へは「配付セス」と書き込まれている＝JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B02033033600(第2画像目)、大東亜戦争関係一件/外務省記録(A-7-0)(外務省外交史料館)

日本軍占領地である仏領インドシナ(現・ベトナム)、中国、満州の各地を、朝日新聞社の飛行機で視察した。

その後、豊彦は軍政下にある占領地ジャワで発行されたジャワ新聞の編輯局長に転出(これを特高の追及から逃れたものと見ることはできないだろうか)。

二十年七月東口社長の殉職により、後任の社長に就任した。終戦一週間前の八月八日のことだった。

豊彦の回想は(終戦後はジャワやシンガポールの抑留所を転々とした末、オランダの国民服にリュックサックという格好で、昭和二十一年に帰国しましたと、労苦の程を語らない。

(いしたき・とよみ＝福岡
地方史研究会会長)

曲坂の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

ジャワ新聞社の『ジャワ・バル』（「新ジャワ」）は月二回発行のグラビア誌である（インドネシア語・日本語）。昭和二十（一九四五）年八月一日号の表紙では特攻隊員とおぼしき三人が談笑している。

最終号となるこの号の奥付にだけ発行者「T・M・A SUDA」の名が刻まれた。言うまでもなく八月八日に社長に就いた益田豊彦である。

『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』は、戦後の豊彦の〈軍政は失敗だった〉という証言を拾っている。〈戦局が悪くなると、日本人は、とたんにデスベレート（絶望的）になってしまつて昼間から酒を飲み、

評論活動

世界平和、高らかにうたう

つて）自ら筆をとる機会をもたなかった。窓際族の自嘲をもらしたのではない。二十三年二月、スイスからアメリカを経て帰国した笠信太郎が論説主幹なら、豊彦は副主幹。彼特有の奥ゆかしさが言わせたものが「片すみ」発言なのだ。実はこの時期、活発な評論活動を展開していた。

「第三次大戦は不可避免か」という特集を組んだ『再建評論』二十四年十二月号に、豊彦は「世界平和は維持し得る」という一文を寄せた。第二次世界大戦が終結して四年。米ソの対立は東西両陣営の冷戦へと向かっていた。豊彦は「わかれわれに」とって一番大切なことは、自ら世界平和創造の使徒たる自覚をもつことと、へそ

中でも軍人と軍属、シビリアン（軍人でない文民）の間に差をつけ、いわんやインドネシア人に至っては二十一年五月、豊彦は祖国の土を踏み、朝日新聞社に復帰した。〈再び論説委員室の片すみに机を与えられた終戦後三年あまりの期間を除けば（管理部門に移



益田豊彦他著の『講和会議と日本』。102頁の粗末な装丁で定価70円。よく売れたという

備非武装国家、完全な平和国家〉だと主張する。憲法第九条を絶対視した故ではなく、「香り高い平和の理念」を掲げようというのだ。『朝日評論』では二十四年三月号の座談会「経済再建と失業問題」、二十五年三月号の座談会「アジア冷戦」となる」に出席した。丹頂書房刊『講和会議が終ると日本はどう変わる』は「大好評！飛ぶような売れ行き」で、三カ月後の二十四年十一月には増補改訂版が『講和会議と日本』と改題して発行された。総論は豊彦が担当したが、ここで「今日世界の人間にとつて、一番大切なことは、戦争不可避免を前提としたいろいろの議論を乗り越えて、世界平和確保のために、献身的な努力を注ぐこと」だと主張した。ジャワで理想と現実の落差を味わった豊彦は、戦後は現実論よりも理想論を志向したようだ。

私たちはともすれば理想論を無力と決めつけがちである。この時代、法的にはまだ戦争状態は終わっていない。占領イコール未講和なのである。戦渦をくぐり抜けたゆえの理想論。まさに戦後民主主義のまっただなかであったことを忘れるわけにはいかない。（いしたき・とよみ＝福岡地方史研究会会長）

(第3種郵便物認可)

曲折の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

19

石川達三の小説「風にそよぐ葦」の主人公葦沢悠平は自由主義者で総合雑誌「新評論」の社長である。新評論は戦時中、軍や特高に左翼としてにらまれ、東條内閣末期の昭和十九年七月、廃業に追い込まれた。

戦後再刊したものの、葦沢は今度は社内の労働組合の批判にさらされたうえ、昭和二十一年十一月、GHQの公職追放指令によって社長の地位を追われる。向きを変える風に翻弄されながらも、それに耐えるしかない人間の姿が小説の表題となっている。

新評論は中央公論をモデルにし(戦時中の横浜事件

では七人が検挙され、二人が獄死した)、葦沢悠平の姿は事実そのままではないとしても、幾分か中央公論社長・嶋中雄作のエピソードが取り込まれている。益田豊彦の弟・直彦は横

によると、益田直彦は二十一年六月入社、第二出版部長に就任した。中央公論編集部長はやはり横浜事件で有罪判決を受け復職した畑中繁雄。他に蠟山政道(副社長、後にお茶の水女子大学学長)、谷川徹三(婦人公論主幹、後に法政大学総長)、林達夫(出版局長、後に評論家)ら、今振り返ると錚々たる人たちが役職を埋めていた。

直彦の戦後

横浜事件は語らぬままに……

浜事件で検挙され、終戦直後、執行猶予付き有罪判決で横浜拘留所を出た。その後、私たちは中央公論社に直彦の名を見いだす。『中央公論社の八十年』

起きた。以下、『八十年』からの引用である。二十二年一月、嶋中社長はマッカーサー司令部から、戦時中軍部に協力したという理由で、追放該当者

に指定された。軍に協力しなかつたために解散を命ぜられたことを、むしろ名譽として中央公論社として思いがけぬことだったので、ただちに反証をあげ

るべく努力した。ところが当時の組合は決議によって、その協力を拒否した。のちにこれは撤回されたが、このことによって社内

の対立は激化した。結局二十二年秋から三年春にかけて、畑中繁雄ほか十数名の退社によって終熄を見た。八月三十一日、在職一年

二月月程で益田直彦が退社、九月十八日、後を追うように畑中繁雄が退社した。中村智子『横浜事件の人びと』は「益田は……嶋中雄作社長のGHQによる追放をめぐる第一次中央公論社事件のさい、社内の空気にたえかねてまっさきに



退社した人である」と書いている。次に直彦の名が出て来るのは三十三年に刊行された『山一証券史』である。本文は千二百二十六、年表が二百二十六。大冊だ。編集後記は社史編集室長益田直彦が書いた。直彦は中央公論社から山一証券に移り、調査課長、秘書役を経て、三十一年二月、特設の社史編集室長に就いていたのである。

直彦は横浜事件について公に語る事がなかった。中村智子の取材に、その理由を「事件関係者が、自分が被害者の主役みたいにしやしゃり出ているのが性に合わないからだ」と答えている。ひけらかさない生き方が兄豊彦とそっくりだ。昭和六十一年十月十七日死去。享年七十九歳。(いしたき・とよみ「福岡地方史研究会会長」)

曲折の行路

昭和史と益田豊彦

石瀧豊美

20

「割れても末に逢はむとぞ思ふ」は恋の歌だが、笠信太郎と益田豊彦の人生はそんなふうにあつた。

二人は中学修猷館に入学して知り合った。卒業後、笠は東京、豊彦は熊本と別れたが、豊彦が東京帝大へ入学して交遊は復活した。

高松高等商業学校教授、労働農民党調査部長と振幅の激しい道を歩んだ豊彦は、昭和六(一九三二)年ドイツへ旅立つ。九年に帰国するまで朝日新聞のベルリン特派員を務めた。一方、笠は大阪の大原社会問題研究所から十一年東京朝日に移って、二人は同僚となった。戦争末期、豊彦はジャワ新聞社に赴任し、笠は欧州特派員としてスイスのベル

バルブ顧問になる。

朝日新聞を辞めた後、国策バルブへ迎えられたときさつはこうだ。去る五月、あるノツビキならぬ筋からの要請に見事寄り切られて、国策バルブ工業という株式会社を取締役に選任された。…もう自分の人生行路に曲り角は来ないだろうと信じ(ていた私が)また一つの曲り角にぶつかった。

三十四年、大阪本社代表取締役の豊彦はへしかここに一人の怪物を登場させた。

晩年

水野成夫に誘われ？ 国策バルブへ

しもうポツポツ六十ですが、私の人生遍路にも、もう曲り角はやって来ないだろうと思つています」と書いた。

東京本社代表取締役を経て、四十年取締役を退任した(六十六歳)。四十二年に国策バルブ工業取締役、監査役、四十七年山陽国策

せよう。大宅壮二が「大正、昭和の日本を二人で象徴する」人物の最有力候補と認められた男(昭和怪物伝)。「そのバケかたの変幻きわまりない点において、戦前戦後を通じての日本記録保持者」と呼んだ水野成夫だ。

水野は東京帝大で新人会(左翼学生運動)に属し、

卒業後の昭和二年、日本共産党中央委員。翌年の三一五事件で検挙され、獄中転向第一号となった。後に続く大量転向の発端である。

革命から文学に転じる。と、仏文学の翻訳がベストセラーになった。戦時中は古新聞を再生するというア

アイデアで、軍と協力して大日本再生製紙株式会社を起し、これが国策バルブ工業に吸収されて、その副社長、三十一年には社長となった。文化放送、フジテレビ、産経新聞社長も歴任した。

「ノツビキならぬ筋」とはおそらく水野成夫だ。水



奥に見える通りの右側に豊彦の実家・益田家があった。手前の広い道は「赤坂けやき通り」
—福岡市中央区赤坂2丁目

野は大正十三年、豊彦と同じ年に東大法を卒業している。豊彦は新人会に名を連ねていないが、水野とはその頃からの付き合い(同志)ではなかったか、と思う。水野は若き日の友情から、豊彦を国策バルブ工業に誘ったのだろう。

益田豊彦は四十九年七月十一日午後四時三分、東京虎の門病院で死去。その曲折多き人生行路を閉じた。数えの七十五歳であった。(いしたき・とよみ)福岡地方史研究会会長

|| おわり